

苦くて嬉しい卒業式

東京都大田区 佐々木 幹 雄 (60)

小学校の卒業式が近づいたある日、担任の中島先生から「明日、卒業文集を作るのを手伝ってくれないか」と頼まれた。今から半世紀も前の、北海道釧路市での話だ。

五年生の秋、我が家は遠方に転居したが、転校せずに一時間早起きしてバスで通い続けた。親には友達と離れたくないと説得したが、本当は先生と一緒にいたかったのだ。それまでの担任のような暴力は振るわず、どんな生徒にも明るく接する中島先生が大好きだった。

翌日、卒業作文をガリ版で印刷し、ホチキスで留めた。先生と二人、色んな話をしながら作業をするのが楽しくて仕方がなかった。

夕方、文集が完成すると、先生は同じバスに乗って来た。「ちょっと一緒に行きたい所があるんだ」と繁華街で降り、路地裏の古びた喫茶店に入った。しばらくして、先生と顔馴染みらしい髭だらけのマスターが、コーヒーを二つ運んでき

た。十二歳の私は眩いた。

「喫茶店に入るのも、インスタントじゃないコーヒーを飲むのも、生まれて初めてです」

砂糖を入れようとしたら、先生は私をまっすぐに見つめ、「今日は、砂糖もミルクも入れずにそのまま飲んでごらん。ブラックだ」

口に含むと、びっくりするくらい苦かった。吐き出しそうになるのをやっとこらえた。

「これからも我慢してコーヒーはブラックで飲んでみるといい。いつか、苦さがおいしさに変わっている。その時、君は大人になっている……なんって、僕も昔、誰かさんに言われたんだけど」と、マスターのほうを見た。

マスターはにっこりしてVサインを出すと、

「卒業おめでとう。今日は私のおごりだよ」

先生は、私の肩に手を置いた。

「長い間、本当に頑張ってバスで通ったな」

涙と苦さ、そして中島先生に出会えた嬉しさを、残りのコーヒーと一緒に飲み込んだ。

……数日後にあった学校の卒業式のことほとんど覚えていない。先生と一緒に過したあの時間が、私にとっての卒業式だったのだ。